様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：４３９２３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０５９８

研究課題名（和文）家族コミュニケーションパターンと対人コミュニケーション様式の関連性：日米比較研究

研究課題名（英文）Family Communication Patterns and Interpersonal Communication Styles: A Japan-U.S. Comparison

研究代表者
森泉　哲（Moriizumi, Satoshi）

南山大学短期大学部・英語科・准教授

研究者番号：６０３１０５８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,400,000円、（間接経費）　720,000円

研究成果の概要（和文）：従来の対人コミュニケーションに関する比較文化研究では，国文化に焦点をあてて，とりわけ「個人主義ー集団主義」という観点から検討を行ってきたが，近年では集団主義の代表として扱われてきた日本社会での研究結果が，予測と反していることも指摘されてきた。そこで，本研究では，文化の多層性の視点から家族文化を研究の対象に加え，ソーシャルサポート要請ならびに対人葛藤方略を例に対人コミュニケーションスタイルとの関連について検討した。その結果，依然として国単位の文化差も見られるが，むしろ家族コミュニケーションが対人コミュニケーションスタイルを規定する相対的に大きな要因である可能性があることが見出された。

研究成果の概要（英文）：Studies on cross-cultural comparisons of interpersonal communication have been focusing on national cultures, particularly from the dimension of individualism-collectivism. However, recent studies have found that these research results were against theoretical predictions that Japan was considered as collectivist. The purpose of the current project, therefore, was to include family cultures in addition to the national culture from multicultural perspectives, and to investigate relationships between multi-level cultural factors (i.e., national and familial levels) and interpersonal communication styles such as those in social support seeking and interpersonal conflict situations. The results of the current project have found that family communication patterns, rather than national cultures, could serve as influential factors in predicting interpersonal communication styles.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：対人コミュニケーション　家族コミュニケーション　日米比較　比較文化　ソーシャルサポート　対人葛藤

１．研究開始当初の背景

比較文化心理学及び異文化コミュニケーション研究において従来より「集団主義―個人主義」(Triandis, 1995)または「文化的自己観（相互独立的―協調的自己観）」(Markus & Kitayama, 1991)という概念から，特にその概念上両極とされるアメリカと東アジアの国を比較して精力的に文化・自己がコミュニケーション行動に及ぼす影響について検討がなされてきた(Gudykunst et al., 1996; Oetzel & Ting-Toomey, 2003)。しかし，「欧米＝個人主義」,「東アジア＝集団主義」という定説を覆す研究は最近みられるようになり（Oyserman et al, 2003; Takano & Osaka, 1999），必ずしも「国＝文化」とは限らず，比較文化研究での文化の扱いが再検討される必要があった。対人行動は，様々な文化・環境の影響を受けると考えると，対人行動の理解には，文化の多層性の観点から検討が必要とされる。

２．研究の目的

本研究の目的は，国文化，家族コミュニケーションパターン，自他意識が，どのように対人コミュニケーションスタイルに影響を及ぼしているのかに関して検討することである。具体的には，(1)対人コミュニケーションを多層的な文化から検討すること，(2)対人コミュニケーションを主に「ソーシャルサポート」「対人葛藤」の正負の両面となるメッセージから検討すること，(3）なぜそのようなコミュニケーションスタイル（様式）がとられるのか，関係満足感や自他意識から検討すること，という３点にまとめられる。

(1) 多層的な文化からの検討

「国＝文化」という概念に対する批判を乗り越えるために，国という概念だけでなく，他のマイクロ文化的側面（地域，共同体，家族）を加えた分析が必要であるが，本研究では，文化に関して２層を取り上げ，国レベルとして日本，アメリカを対象として，マイクロ文化として「家族」をとりあげ，国，家族という文化がどのように対人領域のコミュニケーションスタイルに影響を及ぼしているか検討する。家族は，子供がその文化の構成員になるという「社会化」を行うもっとも重要なエージェントであり，他の対人領域（友人や恋人等）に必要なスキルを学習するとされ（Sarason et al., 1987），実際に，対人領域の対人葛藤方略パターンに影響を及ぼすという研究結果もみられる(Koerner & Fitzpatrick, 2002)。本研究では，どのようなコミュニケーションスタイルをとるのか，家族コミュニケーションパターンとの関連から検討する。

(2) コミュニケーション様式

コミュニケーション様式については，メッセージの内容との関連で，対人葛藤スタイル，サポートスタイル，相手を攻撃・貶めようとするソーシャル・アンダーマイニングなどが取り上げられてきたが，必ずしも統合的に研究されてきたわけでなく，研究の関心によって別々に扱われてきた。よって，対人・異文化コミュニケーションの理論を発展させるためには，より大きな枠組みからメッセージの鳥瞰的にみるアプローチの構築が目指されよう。対人コミュニケーション研究において，「対人葛藤」＝「影の側面」,「ソーシャルサポート」＝「光の側面」と暗黙に捉えられがちであるが，発話者の意図・態度・特性によっては，対人葛藤場面はよりお互いの理解が深まる状況にもなり，また反対にサポート場面においては，メッセージによっては，相手をより落ち込ませてしまう原因にもなりうる。つまり，発話者の意図，受信者の認知によって「葛藤」「サポート」場面は，両価的であり，対人コミュニケーションの光にも影にもなり得る。そこで，本研究では主にこの２種類のメッセージに関するスタイルについて検討する。

(3) 行動様式の要因―自他意識，関係性―

対人葛藤やサポートメッセージの規定因としてフェイス（面子）意識を取り上げて，両価的なメッセージは自他意識の特徴によって規定される傾向があることを明らかにする。フェイスとは,「公的な自己イメージ」と定義され(Brown & Levinson, 1987)，さらに自己に対するフェイス，他者に対するフェイスがあるとされ，さらに相手から承認されたいという「承認的フェイス」，また相手から独立した自己でありたいという「独立的フェイス」があるとされ(Ting-Toomey, 1988)，測定尺度の開発も試みられている(Moriizumi, 2010)。これらの枠組みから対人葛藤方略を検討した結果，大雑把にいうと，他者フェイスが高いとより服従的な方略が選択され，また自己フェイスが高いとより主張的な方略がされる。ソーシャルサポートが必要とされる場面においても，他者フェイスはより精緻化されたメッセージが使用される(McDermott & Moriizumi, 2011)。これまで筆者らが行ってきた研究は発話スタイルの側面であり，受信者としてどう発話を認知するのかという側面は行ってこなかった。そこで，発話者・受信者の両側面から，家族コミュニケーションとの影響からフェイス意識とともに検討する。さらに，コミュニケーション過程の全容を理解する際には，なぜその発話がなされるのかを検討する必要がある。つまり発話の内容とソーシャルスキルとの関連または相手との関係満足度について明らかにする必要がある。以上の観点から検討することにより，家族のあり方も踏まえて，実際の日常生活における人間関係構築に示唆を与える知見が本研究によって得られるのではないかと予測し，本研究を以下のような方法から実施した。

３．研究の方法

研究目的である以下の図のモデルを検討するために，日米の大学生各約 200 名を対象として，質問紙調査を実施した。一度に，図の関係性について検討するのは困難であるので，主に【研究１】から【研究３】の段階に分け，既存のモデルの理論的妥当性を確認しながら，モデルを発展できるように３期に分けて研究を遂行した。分析方法はいずれも共分散構造分析，多変量分散分析等による。

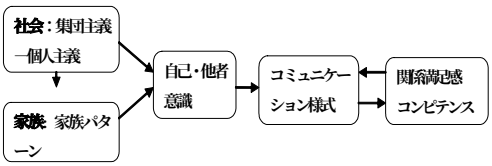

図１　本研究のモデル

(1)研究１－国文化，自他意識，ソーシャルサポートとの関連

調査対象者は，米国大学生 181 名（男性 70 名，女性 110 名）であり，人種・構成は白人 45.9%, ヒスパニック系 35.9% , アジア系 4.4%, ネイティブアメリカン 2.2 %，アフリカ系 6.1% ，その他 5.5% であった。平均年齢は 20.4 歳（SD = 4.60）であった。日本は大学生 239 名（男性 35 名，女性 204 名）で，全員が日本国籍，平均年齢は 19.2 歳（SD = 1.10）であった。

質問紙構成は以下のとおりである。a） 友人が困っている場面の提示（3 場面）と友人へのサポートメッセージの自由記述（①期待はずれの成績，②恋人との失恋，③父親の失業），b） 「フェイス意識尺度」(Ting-Toomey & Oetzel，2001）15 項目（7 件法），c）自己愛的傾向尺度（NPI-16）（Ames, Rose, & Anderson, 2006） 16 項目（強制選択法）である。

なお，自由記述されたメッセージに関して，Burleson (1982)が示したコーディング法により，他者中心性の観点から 9 段階にコーディングを行った。

(2)研究２－国文化，家族コミュニケーションパターン，ソーシャルサポート要請との関連

調査参加者は，米国は大学生 262 名（男性 111 名，女性 151 名）であり，人種・構成は白人 42.6%，ヒスパニック系 39.9% ，アジア系 2.3%，ネイティブアメリカン 2.3 %，アフリカ系 8.7% ，その他 0.4% であった。平均年齢は 20.83 歳（SD = 5.68）であった。日本は大学生 252 名（男性 113 名，女性 139 名）で，全員が日本国籍，平均年齢は 19.28 歳（SD = 1.39）であった。

質問紙構成は以下のとおりである。a） 過去 3 か月でもっともストレスを感じた場面の自由記述，b） その場面において道具的サポート要請の程度 2 項目（例「どのように解決したらよいか，誰かに相談した」）（Carver, 1997），c）情緒的サポート要請の程度 2 項目（「誰かに慰めてもらった」）(Carver, 1997)，d）家族コミュニケーションパターン尺度 26 項目（Koerner & Fitzpatrick，2002）であった。

(3) 研究３－国文化，家族コミュニケーションパターン，対人葛藤方略ならびに関係満足感との関連

調査対象者は以下のとおりである。米国は大学生 360 名（男性 180 名，女性 180 名）であり，人種・構成は白人 59.7%，ヒスパニック系 13.1% ，アジア系 5.8%，ネイティブアメリカン 0.8 %，アフリカ系 15.0% ，その他（回答なしを含む）5.6% であった。平均年齢は 21.02 歳（SD = 2.12）であった。日本は大学生 472 名（男性 201 名，女性 271 名）で，全員が日本国籍，平均年齢は 20.40 歳（SD = 1.64）であった。

本研究は，ウェブ調査により質問項目に回答を求めた。ランダムに，葛藤の相手が，親友または顔見知り程度の大学生のいずれかの条件が示された。また対人葛藤場面は，予備調査によりキャンパスで起こりうる類似葛藤状況と判定された 3 場面（グループプロジェクト，図書館での騒音，クラブのミーティングでの遅刻）のうちいずれか 1 場面が提示され，その状況を想定して，以下の尺度項目に回答するように求めた。質問紙構成は，a）フェイス意識尺度（Moriizumi & Takai，2009），b）対人葛藤方略尺度(加藤，2003)，c）家族コミュニケーションパターン尺度 26 項目（Koerner & Fitzpatrick，2002），d） 関係評価尺度(Hendrick，1988）であった。

４．研究成果

(1) 研究１－国文化，自他意識とソーシャルサポートとの関連

サポートメッセージの他者志向性の程度の国文化による違いを検討するために，t 検定を行ったところ，サポートメッセージの他者中心性の程度は，日本に比較して米国では，より高他者中心性メッセージが使用されていた(t (332.42) = 7.442, p <.001) (米国:M = 4.88, SD = 1.04;日本:M = 4.19, SD = .82)。

自他意識ならびにサポートプロセスについては，図２のとおり，両国とも自己愛傾向から相互フェイスに負の影響を及ぼし，相互フェイスが高他者中心メッセージに正の影響を及ぼすというモデルになった。特に米国では自己愛傾向から相互フェイスにより強い影響を及ぼしているという文化差を除けば，本モデルのパス配置，係数ともに両文化では不変というモデルであり，適合度も十分であった（ $\chi 2$ (104)= 176.36, p <.001, GFI=.94, AGFI= .90, RMSEA=.041)。このことから，メッセージのレベル自体には文化差が生じるが，その過程については文化差とい

うよりも，個人の特性がメッセージ産出に大きく影響を及ぼしていることが示唆された。

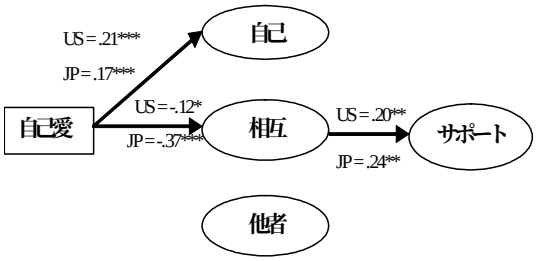

図2 自己愛傾向，フェイス意識，メッセージのプロセス

（2）研究２―国文化，家族コミュニケーションパターン，ソーシャルサポート要請との関連

国文化，家族コミュニケーションパターンとソーシャルサポート要請のプロセスは，図３のとおり，家族コミュニケーションパターンが国の文化を完全に媒介する効果が見られた。米国では，より会話志向性，従順指向性を高め，それが，道具的・情緒的援助要請を促進するモデルであり，適合度も十分であった（$\chi 2$ (79)= 162.54，p <.001，GFI=.96，AGFI= .94，RMSEA=.045)。また，会話志向性と服従指向性の影響度の違いには有意差が見られなかった。このことから，日本では，相対的に会話志向性・服従指向性共に相対的に低く，それが相対的に援助要請をしないということとなった。つまり，援助要請過程については国という文化差だけでなく，家族のコミュニケーションパターンが大きく影響を及ぼしていることが示唆された。なお，自他意識であるフェイス意識を投入して検討したが，さほど大きな影響を及ぼしていないことが見出されたため，モデルの中には，図示しなかった。

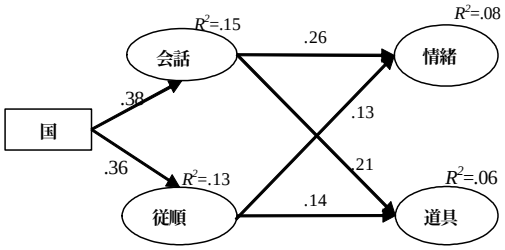

図３　国，家族コミュニケーションパターンと援助要請との関連

(3) 研究３―国文化，家族コミュニケーションパターン，対人葛藤方略ならびに関係満足感との関連

家族コミュニケーションパターン，フェイス意識，対人葛藤方略，関係満足感の関連について，多母集団共分散構造分析によって検討した結果，日米間にパス係数に等値制約をかけないモデルでの適合度はまずまずの値を示した（$\chi 2$ (18)= 47.07，p <.001，$\chi 2$/df = 2.62，GFI=.97，AGFI= .90，RMSEA =.062)。具体的には，会話志向性ならびに従順志向性は共に，自己および他者フェイス意識に正の影響を及ぼすことが見出された。また予測どおり，自己フェイス意識は，統合及び支配方略と，他者フェイス意識は回避方略と正の影響を示した。統合方略のみ，関係満足感に正の影響を及ぼすことが見出された(図４)。

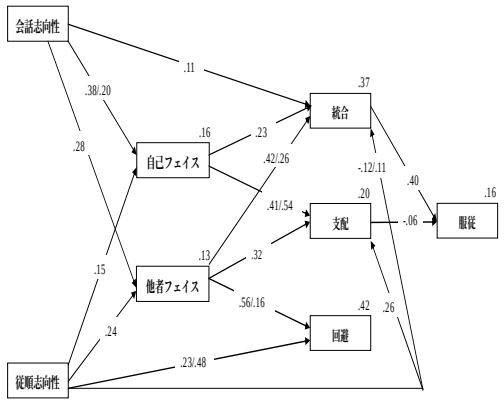

図４　対人葛藤方略のプロセス

日米間の文化の調整効果について検討するために，各パス係数に等値制約を施したところ，６つのパス係数の差が有意であった。したがって図４のパス係数は，文化差がみられていないパス係数の値は日本の値を示しており，文化差が見られた係数は，左の値が日本を，右の値は米国を表している。パス係数が正負の逆の関連を示したパスは一つあり，従順志向性から統合方略へのパス係数であり，日本では負の値であるが，米では正の値を示した。その他は，日本は米国と比較して，会話志向性から自己フェイス意識，他者フェイス意識から回避方略ならびに統合方略への影響の度合いが強く，一方，米国は日本より，自己フェイス意識から支配方略，従順志向性から回避方略への影響が強いことが見出された。特に従順志向性が他の変数に及ぼす影響に国による文化差がみられ，従順志向性は日本ではややネガティブに捉えられているが，米国ではよりポジティブな意味合いで捉えられているようである。従順志向性の意味に対する再検討が必要であろう。

（４）総合的な成果

以上３段階の研究成果を総合すると，国文化の違いは対人コミュニケーションスタイルに影響を及ぼし，日本人はアメリカ人と比較して，ソーシャルサポートに対して消極的なコミュニケーションをとり，また対人葛藤に対しても，より回避方略を使用していることが見出された。これは，従来より指摘されてきた「集団主義―個人主義」という概念から説明されると考えられる。しかし，本研究の目的でもある家族コミュニケーションという家族文化の概念を導入すると，国文化の影響よりも，家族文化の概念でより説明でき

ることも本研究で見出された。むしろ，家族コミュニケーションパターンも国文化の影響を受け，日本ではアメリカに比較して，会話志向性，従順志向性ともに程度が低いことが見出され，その傾向が直接対人コミュニケーションスタイルに影響を及ぼしていることが見出された。また詳細な分析を行うと，国文化の差によって，対人コミュニケーションプロセスが全く異なるというものではなく，概念間のプロセスは普遍的なものであるが，国文化が概念間の影響の程度に差を生じさせるという文化の調整効果が見出されている。

また対人コミュニケーションの対人葛藤とサポートと別々のメッセージを家族コミュニケーション，自他意識という観点から捉えなおすと，両概念によって，メッセージ方略の説明ができることが明らかとなった。自他意識ともに高い者は，より効果的とされるメッセージを他者に伝達できるスキルを保持していると考えられ，教育的な応用が期待される。

以上のことから，本研究を通して，国単位による比較文化研究は全く意味のないものではなく，依然として国単位によるマクロ文化からの比較文化の視点は，対人コミュニケーションの予測・説明に有用であるが，家族文化という新たな概念を導入することで，対人コミュニケーションスタイルの予測・説明力が高まることが示唆された。

このことは，対人コミュニケーションスキルを養成する際には，国文化としての特徴だけではなく，様々な文化（国，地域，人種，性，職業等）を意識し対人行動に対して多層的な側面から理解することの重要性を示唆していると思われる。グローバル時代を迎え，様々な文化の人々と円滑な対人コミュニケーションを行うためにはどうあるべきか，その様態と合わせてさらなる研究が必要であり，本研究はその方向性の一端を担ったものになったことを期待している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

① Moriizumi, S., & Takai, J. Face Concerns in Interpersonal Conflict: Elaborating on Face Negotiation Theory, 社会言語科学，査読有，第 15 巻第 2 号，2013，pp.46-57.

〔学会発表〕（計　６件）

① Moriizumi, S. Are Family Communication Patterns Transferable to Interpersonal Interactions? Social Support Seeking in Japan and the United States, 85th Annual Convention of Western States Communication Association, 2014 年 2 月 16 日，カリフォルニア州アナハイム（アメリカ合衆国）

② Moriizumi, S. Family Communication Patterns and Social Supoort Seeking in Japan and the United States: A Socio-Ecological Perspective . The 14th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology , 2014 年 2 月 15 日，テキサス州オースティン(アメリカ合衆国)

③ 森泉哲，コーピングスタイルと関係満足感との関連－日米比較－，日本社会心理学会第 54 回大会 ， 2013 年 11 月 2 日，沖縄国際大学

④ Moriizumi, S. Family Communication Patterns in Social Support Seeking: A Cross-cultural Comparison between Japan and the United States , National Communication Association 98th Annual Convention , 2012 年 11 月 18 日，フロリダ州オーランド（アメリカ合衆国）

⑤ 森泉哲，ソーシャルサポートを誰に，どのように求めるのか？－日米比較ー，社会言語科学会第 30 回大会, 2012 年 9 月 2 日，東北大学

⑥ 森泉哲，自己愛的傾向，フェイス意識がサポートメッセージに及ぼす影響 ， 日本心理学会第 75 回大会，2011 年 9 月 15 日，日本大学

６．研究組織
(1)研究代表者

森泉　哲（MORIIZUMI, Satoshi）
南山大学短期大学部・英語科・准教授
研究者番号：６０３１０５８８